オーストラリアにおける日本研究（人文科学について）1980年～1994年—予備ノート—

リース・ダグラス・モートン（ニューカッスル大学）
Leith D. Morton

緒言

拙論は、1980年から現在までのオーストラリアにおける日本研究の動向を、人文科学に絞って考察してみようとするものである。便宜上、人文科学の定義はかなり狭く考えて、民族学、社会学、経済学、政治学など社会科学に属するべき分野はここでは一応除外することにした。情報源として今この時点で最も主要なものは、豪州アジア学協会（Asian Studies Association of Australia Inc., ASAA）の発行している『Asian Studies Review』（アジア研究評論）が年一回特集する「Australian Publications on Asia」（オーストラリアのアジア関係出版物）という文献目録である。ここに挙げられているオーストラリアにおける日本関係の刊行物の情報源は、印刷物としてはほとんどこの目録であるが、豪州日本学協会（Japanese Studies Association of Australia）が二年に一度開催する学会の分析や筆者が個人的に知己を得ている研究者からの情報、あるいは各種刊行物の文献索引を参考にして論を進めていきたい。全体を三部に分け、第一部は、日本文学関係の出版物についての考察、第二部は、日本歴史関係、そして第三部は、美術・音楽を含む芸術一般および言語関係の出版物を考察していこうと思う。最後には、教育機関別の研究状況を報告しようと思う。

1．1980年～1994年までの日本文学研究

1970年代末から1980年代の初めにかけて、外国生まれの研究者による日本文学研究への貢献が目だっている。外国生まれの研究者は、主に英国、アメリカ、そして日本の出身者で、研究の基礎全般にわたってさまざまな形で貢献しているが、とくにオーストラリアの大学教育と、そして出版への貢献にめざましいものがある。オーストラリアは、二世紀にわたって海外からの移住者が築いた社会基盤の上に建つ社会であり、オーストラリアに長く腰を落ち着けている海外研究者も多いが、短期間だけのオーストラリア滞在という研究者も少なくない。現在ケンブリッジ大学の主任教授であるリチャード・バウリング（Richard Bowring）は、当時モナシュ大学で教鞭をとっており、1979年に画期的な学術書『Mori Ogai and the Modernisation of Japanese Culture』（Cambridge University Press, 1979）を出版している。英国出身の学者二人、日本在住の詩人ジェームズ・カーカップ（James Kirkup）と、シドニー大学で東洋学教授として25年以上勤めたA・R・デービス（A.R. Davis）は、共同で1978年に University of Queensland Press から「Asian and Pacific Writing Series」の一環として、『Modern Japanese Poetry』を出版した。これは翻訳書として重要な一冊である。1979年には、当時も今もシドニー大学で教鞭をとってい

る小林弘子が東京の東洋文庫から『The Human Comedy of Heian Japan (A Study of Konjaku Monogatarishu)』を出している。香港を本拠とするイギリス人、グレアム・ウィルソン（Graeme Wilson）も同じ時期にオーストラリアの学術雑誌に日本の詩人についての論文を数篇書いている。

オーストラリア生まれの学者でクイーンズランド大学の日本研究主任教授として長かった故ジョイス・アクロイド（Joyce Ackroyd）は、1979年に東京大学出版会から『折りたく柴の記』の翻訳書『Told Around a Brushwood Fire: The Autobiography of Arai Hakuseki』を出版している。この時期には、クイーンズランド大学とシドニー大学が日本文学研究の中心であり、オーストラリア人の若手の学者、ナネット・トワイン（Nanette Twine、現在はゴットリエブ Gottlieb）と私もこの頃から、それぞれ言文一致運動と有島武郎についての論文を雑誌に発表して学術活動を始めている。

1978年に豪州日本学協会（Japanese Studies Association of Australia、JSAA）が発足し、オーストラリアにおける日本研究は多大な支援を得ることになった。1981年に学会発表論文集の創刊号『A Northern Prospect: Australian Papers on Japan』がハロルド・ボライソとアラン・リックスの編集でまとめられ、日本文学関係では、ジェーン・デビット（J.C. Devitt）の上田秋成論とリース・モートン（Leith Morton）の有島武郎論が掲載されている。シドニー大学を中心に長く刊行を続けている Journal of Oriental Society of Australia（JOSA）は、『Austrina』と題する協会創立25周年記念号を1982年に刊行した。ジョイス・アクロイドは高村光太郎論、オーストラリア国立大学（ANU）のイギリス人、リチャード・メースン（Richard Mason）は『新古今集』論、シドニー大学の松井朔子と小林弘子はそれぞれ三島由紀夫論と『梁塵秘抄』論をここで発表しており、1980年代を通じ1990年代まで精力的に JOSA の誌上で活躍を続ける各学者の研究領域がよく現われている。

1980年代の中ほども外国生まれの学者が日本文学研究に大きな貢献を続けている。リチャード・メースン（Richard Mason）は西行について、R. マシュー（R. Matthew）は日本の SF について、クイーンズランド大学発行の「Occasional Paper」に書いている。英国の学者、ピーター・コーニツキ（Peter Kornicki）は、このころほんの短期間だがタスマニア大学にいて、「貸本屋」についての論文をいくつか書いた。それより少し前の1982年には、好著『The reform of fiction in Meiji Japan』をオックスフォード大学東洋学部委員会の支援のもとに Ithaca Press から上梓している。アメリカ人の学者、ドリュー・ガースル（Drew Gerstle）は、今はロンドン大学の日本研究教授であるが、このころオーストラリア国立大学の日本研究科主任教授の職にあり、1986年に Harvard University Press から『Circles of Fantasy: Convention in the Plays of Chikamatsu』を出している。マーク・モリス（Mark Morris）もまたアメリカ人の研究者で、この時期にはアデレード大学で教鞭をとりながら蕪村や子規、また和歌についての論文を各種の雑誌にいくつか発表している。ガースルは、江戸時代の日本をテーマにした JSAA 学会の発表論文集『18th Century Japan』を編集し、1989年に Allen & Unwin 社から出版した。この論文集には、ガースルやモリスによる日本文学関係の論文の他に、トーマス・J・ハーパー（Thomas J. Harper）の18世紀における『源氏物語』についての論文も収録されている。ハーパーはアメリカ人の学者で、数年前にオーストラリア国立大学を辞してレイデン大学へ移っている。ケネス・

ヘンシャル（Kenneth Henshall）は、シドニー大学のジェフリー・サージェント（Geoffrey Sargent）教授のもとで博士過程を終えたイギリス人の学者で、今はニュージーランドで教鞭をとっているが、1987年にE. J. Brillから田山花袋の『東京の30年』の英訳『Literary Life in Tokyo』を出版している。その前1981年にもヘンシャルは東京大学出版会から花袋の作品の英訳を出している。

オーストラリアの学者では、シドニー大学のH. D. B. クラーク（H.D.B. Clarke）がJOSAやその他に沖縄の詩集『おもろ草紙』の英訳を発表し始めている一方、リース・モートン（Leith Morton）は1988年にAllen & Unwinから『Divided Self: A Biography of Arishima Takeo』を上梓している。沖積舎から1986年に出版された『萩原朔太郎：詩的イメージの構成』を書いた岸田敏子はこの頃モナシュ大学で教鞭をとっていたが、現在は出身校の東京大学へ助教授として帰っている。この頃、主にシドニー大学やクイーンズランド大学、ANUなどで上級（honours）の学部生として、あるいは大学院生として日本の古典や現代文学の学位研究をそろそろ終えようとしていたオーストラリア生まれの若手研究者がかなり多数くいたことを特筆しておきたいと思う。しかし、萩原朔太郎についての博士論文を書き現在はマードック大学で教えている牟田おりえ、西脇順三郎についての博士論文を書き現在はシドニー大学で教えているクレアモント康子（Yasuko Claremont）、1910年ごろの反自然主義の研究で博士号を受けクイーンズランド大学で教えている青山朋子など、大学院の学生は日本で生まれ教育を受けた者が大多数を占めていた。

ワイルド・ピオニー・プレス（Wild Peony Press）は、80年代末にシドニー大学東アジアシリーズを発足した。これはモナシュ大学、ANU、ラ・トローブ大学、グリフィス大学といったオーストラリアの大学が発行するアジア関係の紀要論文やモノグラフを集めてシリーズとして出版するものである。ワイルド・ピオニーのシリーズには日本文学関係の本が多種出版されており、A. R. デービス（A.R. Davis）の英訳による金子光春の自伝『Shijin』（1988年）、松井朔子の英訳による谷崎潤一郎の『A Cat, Shozo and Two Women』（1988年）、モートンの編集によるクラーク、松井、モートン共訳の短編集『Seven Stories of Modern Japan』（1991年）、クレアモントの英訳による『Gen'ei: Selected Poems of Nishiwaki Junzaburo』がこのシリーズに入っている。また、しばらくグリフィス大学で教えていた松本ともねは、『The Showa Anthology』と題する翻訳現代短編集2巻を共同編集し、講談社から1985年に出版していることもここに挙げておきたい。

1990年代初頭の出版物のなかで目立つものを挙げると、ナネット・トワイン（Nanette Twine）の『Language and the Modern State: The reform of Written Japanese』（Routledge、1991年）、モートンの『Mt Fuji: Selected Poems by Kusano Shinpei』（Katydid/ Oakland University、1991年）と同じくモートンの『Anthology of Contemporary Japanese Poetry』（Garland、1993年）がある。元はシドニー大学でいまはANUにいるキャロル・ヘイズ（Carol Hayes）や、牟田おりえ、青山朋子、滝ひろみなど、1980年代末から1990年にかけて博士過程を終えた研究者達がそろそろ著作を発表し始めている。この四人のうち一人を除いて全員が現代日本詩歌専攻なのはちょっとおもしろい。海外から最近来豪したアメリカ人のロイヤル・タイラー（Royall Tyler）は、ANUで今『源氏物語』の新しい英訳に取り組んでおり、オーストラリアにおける日本文学研究に大きなインパクトを与えている。シドニー大学で松井朔子の指導をうけて博士過程を終え、

今はタスマニア大学にいるマリア・フルーシュ（Maria Flutsch）は、夏目漱石についての研究を出版し、今はごく最近の小説をテーマに研究活動を続ける中堅研究者で、世紀の変わり目が近づくのに並行して文学研究の新世代を迎え入れる意気さかんなオーストラリア人研究者グループの典型的な一員である。

2．1980年から1994年までの日本歴史研究

日本文学の研究と同じく、オーストラリアにおける日本歴史の研究も戦前からその歴史が始まるが、海外からの学者がほとんどであった。しかし、80年代の初めになると、日本歴史の研究に対する貢献のほとんどは、オーストラリアで生まれ、大部分の教育をオーストラリアで受けた研究者によるものに変わってきた。オーストラリアにおける日本歴史研究の長老的存在であるハロルド・ボライソ（Harold Bolitho）は、今はハーバード大学にいるが、当時モナシュ大学にいて各種の雑誌に幕末の歴史について精力的に発表していた。当時も今もANUのビアトリス・ボダルト＝ベイリー（Beatrice Bodart-Bailey）も同じ時代について各種の雑誌に発表している。日本経済史の研究のパイオニアは、オーストラリアで生まれ、教育を受けたANUのシドニー・クローコー（Sydney Crawcour）で、雇用史について活発に発表していた。経済史は、当時も今もオーストラリアの研究者にとって重要な分野で、クイーンズランド大学のアラン・リックスやニューサウスウェールズ大学のウィリアム・パーセル（William Purcell）がどちらも戦後の経済史の研究論文を数々の出版物に発表している。オーストラリア人にとってとくに興味の深い歴史の分野は、第二次大戦中、日本人によるオーストラリア人捕虜に対する待遇である。70年代末に反対の立場、つまりオーストラリアの収容所から脱走を企てた日本人の捕虜についての本が二冊出版されている。シャーロット・カー＝グレッグ（Charlotte Carr-Greg）の『Japanese Prisoners of War in revolt』（University of Queensland Press、1978年）とハリー・ゴードン（Harry Gordon）の『Die Like the Carp』（Cassell、1978年）である。この分野は、日本歴史のうちで最も人気のある研究分野で、ビルマ・タイ鉄道についてのオーストラリアと日本の学者による論文を編集して一冊にまとめたANUのギャバン・マコーマック（Gavan McCormack）による貢献が最近のものである。近年、この分野の出版量は非常に多く、その中でも目だっているのはANUにいるオーストラリア人の研究者、ハンク・ネルソン（Hank Nelson）である。

海外から来た歴史学者で80年代初期に活躍していたのは、アメリカ人のスティーブン・ラージ（Stephen Large）で、そのころはアデレード大学にいたが、今はケンブリッジ大学に移っている。20世紀の労働史について研究しており、著書の『Organised Workers and Socialist Politics in Interwar Japan』（Cambridge University Press、1981年）は高く評価されている。また、アメリカ人の歴史学者デビッド・L・デービス（David L. Davis）はシドニー大学にそのころいて、JOSAやその他の雑誌に日本の中世史について発表していた。同じくアメリカ人の歴史家ジョン・ウィーク（John Weik）は、クイーンズランド大学に今もいて、日本の中世と近世史について活発に研究活動を行っていた。

80年代中期の歴史研究には、オーストラリア人の活躍が目立つ。1981年にニュージーランド人の人類学者ウィリアム・ニューウェル（William Newell）は、シドニー大学にいて、『Japan in Asia 1942-1945』と題する論文集を編集している。同じ年のJSAAの学会発表論文集『A

Northern Prospect』を見ると、ビアトリス・ボダルト＝ベイリーの徳川第五代将軍についての論文があり、またレズ・オーツ（Les Oates、メルボルン大学）は汎アジア主義を唱えた二人の日本人についての論文を発表している。1985年に、オーツの著書、『Populist Nationalism in Prewar Japan: A Biography of Nakano Seigo』が、Allen & Unwin 社から先に挙げたガースルとモートンの本が入っている豪州日本学協会（JSAA）シリーズの一冊として出版されている。アラン・リックスも積極的に活動しており、『Coming to Terms: The Politics of Australia's Trade with Japan』（Allen & Unwin、1986年）や『The Japan and Batavia Diaries of W. Macmahon Ball』（1988年）をはじめいく冊かのモノグラフを出版している。80年代を通じて、ANU のジョン・ケイジャー（John Caiger）とリチャード・メイソン（Richard Mason）にも現代政治史についての出版がある。

この同じ時期に、海外からの学者も日本歴史の色々な分野において重要な役割を果たしている。イギリス人の学者、イアン・インクスター（Ian Inkster、NSW 大学）は現代経済史、とくにテクノロジーの遷移について数多くの論文を発表し、著書『Science, Technology and the Late Development Effect: Transfer Mechanisms in Japan's Industrialisation 1850-1912』は、1981年に東京で出版されている。同じくイギリス人の学者で今は ANU にいるテサ・モリス＝スズキ（Tessa Morris-Suzuki）は、1984年に『Showa: An Inside History of Hirohito's Japan』を出版して高い評価を受けている。アメリカ人の歴史家で、著書『Japanese Workers and the Struggle for Power 1945-1947』でよく知られているジョー・ムーア（Joe Moore）もこの頃 ANU に勤めていた。ANU にはまた、オーストラリア人の学者、D. C. S. シソンズ（D.C.S. Sissons）が19世紀から20世紀初頭の日豪関係史について論文を数多く発表しており、80年代を通じて活動的であった。

80年代に色々な分野で広く活躍しているのは、オーストラリア人の学者ギャバン・マコーマック（Gavan McCormack）とラ・トローブ大学の杉本良夫で、この二人は1986年に『Democracy in contemporary Japan』と題する本を共同編集した。この一冊には、若手のオーストラリア人の歴史学者による論文が多く載っており、今はメルボルン大学にいるベラ・マキー（Vera Mackie）やグリフィス大学の主任教授になったサンドラ・バックレー（Sandra Buckley）による新しい日本の状況における女性についての論文が見える。マコーマックと杉本はまた、JSAA の学会発表論文集『The Japanese trajectory: Modernisation and Beyond』を共同編集して1988年に Cambridge University Press から出版しており、この一冊もオーストラリア人の歴史学者の論文を多数掲載している。そのほか、ベラ・マキーは、フェミニストの政治学と母性、日本における平和主義などについての論文をいくつか80年代後半に書いている。モナシュ大学を経て今は ANU の若手歴史家、モリス・ロウ（Morris Low）はそのころシドニー大学で博士課程をそろそろ修了しようとしており、日本の科学の歴史について、とくに20世紀の物理学についての論文を各種の学術雑誌にどんどん発表しはじめている。80年代の終わりを飾るのは、テサ・モリス＝スズキの画期的な著書『A History of Japanese Economic Thought』（Routledge、1989年）である。

1990年に入って、シドニー大学は日本を専門とする歴史学者を３人迎えて、歴史学は大きな刺激を受けた。アメリカで生まれて教育を受けたエリーズ・ティップトン（Elise Tipton、80年代

半ばに就任）は、『Police State: The Tokko in Interwar Japan』（Allen & Unwin/ University of Hawaii Press、1991年）の著者で、最近は女性史についての研究を進めている。現代思想史を専門とするリッキー・カーステン（Rikki Kersten）と経済史専門のマシュー・アレン（Matthew Allen）というオーストラリア生まれの歴史学者が二人シドニー大学に新しく入った。アレンの方はオークランド大学に移って今は現代労働史について研究している。現代日本歴史を専門とするオーストラリア人の歴史学者で90年代に入って活躍しはじめたのは、ラ・トローブ大学のサンドラ・ウィルソン（Sandra Wilson）ととモナシュ大学のフリーダ・フレイバーグ（Freda Freiberg）で、二人とも戦前の満州について研究中である。また、アデレード大学のヘリーン・ブラウン＝ラデカー（Helene Brown-Raddeker）は、戦前の思想史について研究している。ギャバン・マコーマックと杉本良夫は、英語ばかりでなく、日本語でもどしどし出版している。最近、徳川綱吉とケンペルについての日本語の本を出版したボダルト＝ベイリーを90年代の歴史学者のリストにぜひとも加えておかなければならない。オーストラリアにおける日本歴史研究は、これから先、日豪共同のプロジェクトが普遍化する方向へ向かっていくことをこの傾向が示していると言えるかもしれない。

3．日本芸術の研究と語学

1980年以来のオーストラリアでの日本語学研究は、はじめのうちは海外から来た二人の学者が優位を占めていた。ANU で日本研究科主任教授を長年勤めたアントニオ・アルフォンソ（Antonio Alfonso）とモナシュ大学で10年間あまり同じく日本研究科主任教授であったジリ・ネオストゥプニ（Jiri Neustupny、今は大阪大学にいる）の二人である。この時期のアルフォンソの著書は、主に中高等学校カリキュラム用日本語学習書の開発に関するものであったが、ネオストゥプニは、主として言語獲得および言語能力の理論面の分野で出版していた。二人とも明白に日本語教授の方法論への傾きを示す研究者である。ネオストゥプニの関心の方向を如実に示す著作に、東京で1982年に日本語で出版された『Communication with Foreigners』がある。

モナシュ大学のハロルド・ロウ（Harold Rowe）による日本の新聞に関する論文や、ヘレン・マリオット（Helen Marriot）による日本語の助詞に関する論文がいくつかの雑誌に発表されるなど、モナシュ大学は80年代初頭からずっと日本語研究の中心機関となっている。今はニュージーランドのマセイ大学にいる大野清治は、そのころニューカッスル大学にいて、活発に日本語の文法に関する論文を発表していた。一方、シドニー大学の H. D. B. クラーク（前述）は、1981年に『Colloquial Japanese』（Routledge）を出版した。ANU では、イギリス人の学者、アンソニー・バックハウス（Anthony Backhouse）が、80年代前半を通して日本語の言語学的側面についての論文を各種雑誌に精力的に発表していた。1993年にバックハウスは、『The Japanese Language: An Introduction』（Oxford University Press）を出版している。

80年代の中期には、上述の学者が、言語教授法、社会言語学、文法、方言、意味論などの分野で出版活動を続けていた。1984年に大野清治は、『A Generative Grammatical Analysis of Japanese Complement Constructions』（名古屋、中日出版）を上梓している。1984にはまた、短い論文や教科書などで構成される日本語シリーズがモナシュ大学から発刊された。ジリ・ネオストゥプニは、ローマ字や日本語の基本的な語彙についての論文や、日本人との交流についての

教科書など、単独の著者としてあるいは共同著者として、このシリーズの多くを執筆している。後者は、日本語シリーズ中の小シリーズとしてH・ムラオカ、ロビン・スペンス＝ブラウン（Robyn Spence-Brown）、Y・イタニ＝アダムス（Y. Itani-Adams）との共著で出版されている。3人ともモナシュ大学である。このシリーズは、今までに約14冊発行されている。他のモナシュ・シリーズは、ヘレン・マリオット（Helen Marriot）などモナシュ大学の学者ばかりでなく、スインバーン技術大学のアリナ・スコウタリーディーズ（Alina Skoutarides）など、ビクトリア州の他の大学の学者も参加して色々な言語学的話題を広く扱っている。

1988年にドリュー・ガースルが編集した学会発表論文集『18th Century Japan』にはH. D. B. クラークとヒロコ・カッケンブッシュ（Hiroko Quackenbush、元ANU、今は広島大学）による論文二編が掲載されている。同じ年、クイーンズランド大学のピーター・デービッドソン（Peter Davidson）は、内山浩道（グリフィス大学）とM・ブルマー（M. Bulmer）と共に『Japanese for the Tourist Industry』（Hospitality Press, Melbourne）を出版した。80年代後期から90年代初期にかけて、内山とデービッドソンは、翻訳と通訳に関する研究を各自盛んに発表しはじめた。クイーンズランド大学にいるオーストラリア人の学者、ジュディ・ワカバヤシ（Judy Wakabayashi）もこの同じ分野で活躍している。連邦政府の出資によるKey Centre for Asian Languages and Studies（所長はアラン・リックス）の設置と、クイーンズランド大学のイギリス人の学者ピーター・デービッドソンによる日本語通訳プログラムの開発がこの分野の研究にダイナミックな影響を与えていることには疑いの余地がない。この頃ニューカッスル大学にいた大野清治は、90年代に入ってから再度日本語の文法に関する著書を出版し、同じ大学の学者、高津たみえも「のだ」構文に関する主要な研究論文を発表している。この15年間に、言語学関係の卒業論文や修士・博士論文が非常に多く書かれていることも特筆しておきたい。

芸術とその関連分野における研究は、間欠的になされてきた。日本の芸術と建築に関する出版物は、80年代を通じてピーター・アームストロング（Peter Armstrong、シドニー大学）やジャッキー・メンジス（Jackie Menzies、ニューサウスウェールズ州立美術館）などのオーストラリア人の研究者によるものが主であった。しかし、この分野で代表的なモノグラフといえば、1986年出版の、そのころはANUだったが今はメルボルン大学のウィリアム・コールドレーク（William Coaldrake）による翻訳書『Japanese Castles』（講談社インターナショナル）と著書『The Way of the Carpenter — Tools and Japanese Architecture』（Weatherhill、東京、1989年）である。90年代に入ってから、今シドニー大学で教えているイギリス人の学者ジョン・クラーク（John Clarke）も現代日本美術についていくつか論文を発表し始めている。

日本の音楽についての書物は、80年代初期にシドニー大学のオランダ人学者、ウィレム・アドリアーンツ（Willem Adriaanz）が出版したものと、少し後に同じ大学のニュージーランド人学者、アラン・マレット（Allan Marett）によるものがある。マレットの専門は、古典邦楽、特に能楽に使われる雅楽である。モナシュ大学のアリソン・トキタ（Alison Tokita）もまたこの頃から古典芸能についての研究を始めている。

日本の演劇に関する研究は、前述の3人が行っているが、やはり音楽面が強調されている。日本の古典・民間・現代演劇のテキストの分析や語りが中心の芸能についての研究は、シドニー大学の松井朔子が80年代の始めごろからその成果を発表している。ドリュー・ガースルもANUの

主任教授として在任中に浄瑠璃についての研究を発表している。

日本の宗教についての研究はこの時期にはかなり少ない。エイドリアン・スノッドグラス（Adrian Snodgrass、シドニー大学）による仏像についての研究と、ジュディス・スノッドグラス（Judith Snodgrass、西シドニー大学）による現代の仏教についての貢献があることを記しておきたい。非常に短期間であったが、アメリカ人の学者ヘレン・ハードエーカー（Helen Hardacre）がグリフィス大学の主任教授だったころ、新興宗教と神道についての研究を進めていたが、大きな貢献をする間もなく離豪している。

総論

以上、人文科学方面の学術研究を総覧してみて、シドニー大学をはじめ、クイーンズランド大学、グリフィス大学、ANU、モナシュ大学、ラ・トローブ大学、ニューカッスル大学、タスマニア大学など、日本センターや日本研究学科のある大学にほぼ限られていることがわかる。とはいっても他の大学からの重要な貢献がないわけではない。また、学術機関以外の学者による貢献もたまにある。ここではとり扱わなかった社会科学を入れるとするとその様相はまた少し変わってくるはずである。一概に、健全で活発な学術的環境が、オーストラリアにおける旺盛な研究活動の基本的な必要条件であるといえる。そのような環境を培うには時間が必要で、確固とした学術的能力を持つ大学院生や職員が輩出するようになるまでには何年もかかるのが普通である。また、上記の総覧からわかるように、主に日本、アメリカ、イギリスから、その他ヨーロッパの国々からの外来研究者による貢献なくしては、今ほど活発な日本研究の力は生まれ得なかったことは言うまでもない。

しかし、最近任命された日本学科主任教授4人全員がオーストラリア生まれ、あるいは少なくともオーストラリアで教育を受けていることから、大学の重職の「オーストラリア化」が起こっていることは嘱目に値することである。この現象は、この10年間に日本研究が大きく飛躍し、新しい主任教授の席が創設されたことにともなって起こったものである。とくに日本語を学習する学生の数はこの時期に3倍になり、この急増は色々な問題を生じると共に教員数の急増ももたらした。ある調査によると、オーストラリアの人口一人あたりの日本語履修学生数は、日本以外の国では、世界一というほどである。

ここ15年間に、オーストラリアの大学の数も80年代初期の16大学から今の38大学（2大学を除いてすべて公立）へと倍増している。これは小規模の専門大学校を数校合併して新しい総合大学を作ったり、既存の総合大学に併合したりした結果の急増である。日本研究分野のこうした学生数と教員数の増加には、それに見合うだけの必要資源、とくに政府が支給する財政資源の増大があってしかるべきだが、これはなかなか追い付いていない。その結果、図書や言語学習用の特殊設備などの基礎的なインフラストラクチャーを含む必要資源が足らず、今の需要を満たしきることができないでいる。このような資源不足は、日本研究の各種専門分野の水準に影響を与えざるを得ないだろう。しかしその一方、図書や教官のいる教育機関へ出かけて行くことが多くなるために、大学間の学生交流、とくに大学院の学生の交流が盛んになると予想される。

一般的な動向をみると、各大学はそれぞれある研究分野の伝統を培っている。シドニー大学は日本文学、モナシュ大学は日本言語学、クイーンズランド大学は翻訳／通訳という具合である。

しかし、それぞれの伝統が、どの程度今のオーストラリアの思想界で受け入れられている一般的な理論上のあるいは概念上の思考法を取り入れているか、オーストラリア独特の日本研究といえるかどうかには疑問が残る。この分野で活躍する海外からの研究者の数の多さ、そしてオーストラリアで短期間教えて自国へ帰るその入れ替わりの激しさを考えると、オーストラリアにおける一般的な思想傾向は日本やアメリカ、イギリスで今優勢な思想傾向とあまり差がないのではないかと思われる。オーストラリアにおける日本についての研究のなかで、他国の研究に影響を及ぼしている分野は少ないが、言語教授法あるいは応用言語学、とくに社会言語学の分野がその一つである。日本の文芸作品を、米語やイギリス英語ではなくオーストラリア英語に翻訳したものはもちろんユニークには違いないが、それが他国にインパクトを与えるかどうかは疑わしい。最後に、歴史以外の人文科学の分野におけるオーストラリアと日本の比較研究はまだ希少だが、社会科学は別のようである。この20年間にオーストラリアの経済、社会、歴史、文学そして言語についての土着の研究がモメントを得て加速するにつれ、出版量の雪崩現象が起こっているといってもいいことを考えると、比較研究的アプローチも大きな未来が開けているのかも知れない。

〔参考文献〕

ASAA Review Vol.2, No.3 (July 1979) to Vol.17, No.3 (April 1994)

JOSA Vol.12 (1977) to Vols 20 & 21 (1988-9)

JSAA Bulletin Vol.3, No.2 (June 1983) to Vol.4, No.1 (May 1994)

Publications of the Japanese Studies Centre [Monash University] (April, 1994)

Directory of Japan Specialists in Australia [Rev. ed., Directory Series VIII] (Tokyo: The Japan Foundation, 1996)

Japanese Studies in Australia (Canberra: Australia-Japan Research Centre, 1989)

Guide to Asianists in Australia ed. Leanne Wood (Queensland: ASAA, 1992)

Morton, Leith 'What Went Wrong? Translating Japanese Literature in Australia' *Australian Book Review* No.122 (July, 1990) pp.14-17

Morton, Leith 'Australia: Towards a Distinctive Translating Style' *Japanese Book News* No.6 (Spring 1994) pp.6-7